

令和元年度（第41回）

少年の主張 石川県大会

発表記録集

伝えよう！21世紀を生きる君たちの熱いメッセージを



と き ■ 令和元年8月31日(土)

ところ ■ 石川県青少年総合研修センター

石川県 石川県教育委員会 石川県健民運動推進本部
独立行政法人 国立青少年教育振興機構

はじめに

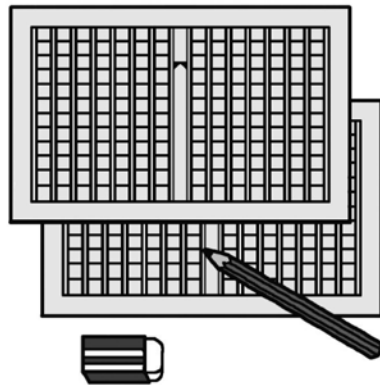
昭和五十四年国際児童年を記念してはじめられた少年の主張石川県大会も、たくさんの方々を支えられ、今年で四十一回目を迎えることができました。

この大会は、中学生が、日常生活の中での体験や考えを自身の言葉でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、中学生世代の社会参加意識の醸成を図るとともに、多くの大人に現代の中学生への理解を深めてもらうことを目的として開催しております。

本大会は、加賀地区、石川中央地区、金沢市地区、能登地区の四地区から選ばれた十六名の中学生が、それぞれの体験から真剣に考えたことを力強く発表し、聴衆に大きな感動を与えました。

この記録集は、その十六名の主張を取りまとめたものです。一人でも多くの方々に読んでいただき、中学生が日ごろどのように考え生きようとしているのかをご理解いただき、今後の子ども・若者活動推進の一助としてご活用いただければ幸いです。終わりに、地区大会をはじめ、この大会のためにご尽力いただきました多数の皆様には厚くお礼を申し上げます。

石川県健民運動推進本部



も く じ

◎はじめに

◎大会発表作品

最優秀賞

ひと滴の力

加賀市立山中中学校 三年 新家 彩桃……………3

優秀賞

笑顔が見たい

七尾市立七尾中学校 三年 長谷さくら……………4

ヒロシマーわたしーつながる平和への思い

小松市立御幸中学校 三年 木崎 晏菜……………5

奨励賞

命のバトンはあなたの手に

かほく市立高松中学校 三年 上坂 陽奈……………6

自分の武器

かほく市立河北台中学校 三年 越野 藍……………7

愛のカタチ

金沢市立野田中学校 三年 岡本杏里沙……………8

「違う」は「ダメ」なことですか？

中能登町立中能登中学校 三年 上野 菜湖……………9

未来を決める大きな選択

七尾市立能登香島中学校 三年 竹中 乃愛……………10

憧れの姿

金沢市立金石中学校 三年 松本 梗耶……………11

日本人らしい譲り合い

白山市立北星中学校 三年 平木千咲子……………12

自分がつくる物語

金沢市立鳴和中学校 三年 岩見 瑚子……………13

便利はほどよく丁寧

七尾市立七尾東部中学校 三年 黒丸 文月……………14

本当の友だち

小松市立南部中学校 三年 山本 理央……………15

「仲間」とは

白山市立笠間中学校 三年 嶋口穂乃佳……………16

伝えることからはじめよう

小松市立芦城中学校 二年 岩崎 響……………17

You can make a big difference with one action

金沢市立紫錦台中学校 三年 岡田 悠芽……………18

(優秀賞、奨励賞は発表順に掲載)

◎審査委員講評……………19

石川県教育委員会事務局学校指導課 担当課長 嶋 耕二

◎少年の主張石川県大会概要……………20

◎石川県大会審査基準……………21

◎地区大会概要……………22

◎第41回少年の主張全国大会

〈私の主張2019〉 内閣総理大臣賞受賞作品……………26



最優秀賞 ひと滴の力

加賀市立山中中学校 三年 新家 彩桃

日本で一番長い川は信濃川。流域面積が一番なのは利根川。では、水面が見えなくなるほど、無数の遺体が浮いたのは何川ですか？

今年の五月、私は原爆の被害に遭われた方から、貴重な話をお聴きするため、修学旅行で広島に行きました。事前にある程度の知識をもって臨んだはずなのに、そこでお聞きした被害の惨状や凄絶な内容には、言葉を失いました。それまで知ることのなかった、被爆者の悲しみや怒り、無念さがそこにはありました。

証言者の川崎宏明さんは、当時小学校一年生でしたが、その時の様子を克明に覚えていらつしやり、説明もとてもわかりやすいものでした。原爆の被害が及ぶ範囲を、単なる数字で表すのではなく、私たちの住む町の大きさをたどってくださったことで、しっかりとイメージが持てました。また、「石川県は比較的空襲の被害が少なかったけれど、二万数千人が戦争で亡くなりました。」とも教えていただき、広島県民の川崎さんの方が、石川県のことをよくご存じで、この講演のために、よく準備をされていたことに驚きました。と同時に、川崎さんの思いの強さを感じました。「この子達に、今のうちに、できるだけのことを伝えよう。少しでも多くの子に平和の大切さを理解してもらおう。」という、必死の願いと焦りのようなものでした。

川崎さんは現在八十一歳で、この先、何年も講演を続けていくことはできません。だから、今しかできない活動を、懸命にされているのだと思います。

先日、「戦争は二度としちゃいかん。」という「魂の叫び」を語ってくれた私の曾祖母が九十六歳で他界しました。また一人私たちは、戦争の悲惨さを伝えてくれる人を失ったのです。これまで私は、今しか聴けない戦争経験者の話にしっかりと耳を傾けることが大切で、と訴えてきましたが、川崎さんの講演の途中から、これはもうただ聴いて終わりだけではいけない。という思いに駆られました。近い将来、すでに戦争経験者の肉声を聴けなくなった世代に、平和への強い思いを引き継いでいくことが、現在の私たちに与えられた使命ではないか。またそうすることが、すでに亡くなった方々への供養にもなるのでは

ないか、という思いです。

でも、戦争を知らない私たちに、その使命は務まるのか。戦争体験者の必死の訴えを本当に受け継ぐことができるのか。そんな悩みの中で講演は終わり、その後、原爆資料館の見学となりました。本当は、持ち主が乗り回して遊ぶはずだった三輪車。本当は、お昼に子どものお腹を満たしてくれたはずの黒焦げになったお弁当。いったい何千度の熱線がガラスの瓶を溶かすのでしょうか。いったいどれほどの光の強さが、人の影を地面に焼き付けるのでしょうか。それら物言わぬはずの展示物は、何を語るよりも雄弁に、当時の状況や苦しみ、悲しみを語っていました。ただ静かにおいてあるだけなのに、こんなにも伝える力がある。そこに、先ほど抱いていた悩みを解決してくれる糸口があると気づきました。何も雄弁に語り継ぐ必要はなく、「話」を聴いて感じたことを率直に語ったり、戦争の足音が聞こえるものには決して賛同しない、という姿勢を示したりするだけでも、十分使命を果たしていると言えないでしょうか。

川崎さんは講演の最後にこうおっしゃいました。「初めに述べた信濃川も利根川も、多くの被爆者が水を求めて亡くなった元安川も、その源は、岩から滴り落ちるひと滴から始まっています。それは、『平和』という途方もない大きな川でも同じこと。たったひと滴でも、この世から戦争をなくす力を持っているのです。そのひと滴に、みんながなっつてほしい。」と。

川は世界をつなぐ海に注がれます。戦後七十四年、平和の川は令和という時代になっても脈々と続いています。この流れを決して途絶えさせてはいけません。他の誰かではなく、私と、あなたでひと滴の力となり、平和な世界をつないでいきましょう。





私は今、髪をのばしています。髪をのばし始めたのは、私が中学一年生だった頃。今から一年半程前です。

「えっ。何あの人。」

思わず声に出してしまいました。私は祖母の家の近くにある図書館で一人の女の子に出会いました。身長は同じくらいで年も近いように見えました。しかし一つだけあきららかに私と違うところがありました。髪の毛です。その子は私と違って髪が一本もありませんでした。幸い私の非情な言葉は彼女には聴こえていないようでした。

私は「なぜ髪がないのか。」と疑問に思い病気のことなどを調べることにしました。重い病気であること、病気の方の本音。深く知れば知るほど、あの時の自分を責める気持ちと、「私はこの病気の子に何ができるのか。」と思う気持ちが大きくなりました。そんな話を母にしてみると、後日知り合いの美容師さんがある活動を勧めてくださいました。「ヘアドネーション」です。みなさんはヘアドネーションを知っていますか。

ヘアドネーションとは、私があの日見た子のように無毛症などの病気で髪を失った子たちに寄付するというものです。三十一センチメートル以上の髪を二・三十人分集めて一人分のウィッグを作ります。髪がのびるのは一カ月に一センチ。寄付する分を伸ばすだけでも二年半ほどかかります。この活動を始めて約一年半。のばして「切りたいい。」と何度も思いました。しかし、その思いよりもずっと病気の子を笑顔にしたいということが勝ってきました。だから、ここまでのばすことができたんだと思います。

そしてこの活動をしていくと同時に「だれかを笑顔にする喜び」がどれほど大きなことなのか知ることができました。この世界には私の助けを必要としている人が沢山いる。そう思ったのはこれまでの経験で、色々なことがあったからです。例えば、私が短期留学に行ったとき。お世話になった家族には違和感がありました。両親ともに肌が白いのに子どもの一人は肌が黒かったからです。話をきけば彼は養子だ

ということでした。私の行ったカナダではそう珍しくはないと聴きました。その子のために家族の一員として幸せになることはすてきなことです。また、私の大親友が急にドナーいわゆる臓器提供者になると言い出しました。訳を聞けば困っている人を助けたいからだそうです。綺麗事だなんて思いません。むしろ私もドナーに興味をもちましたし、彼女みたいな「人のために動く人間」になりたいと思いました。隣の席の子が鉛筆を忘れてきて、貸してあげる。これも立派な「人のために動く人間」です。

今、このときにもこの世界では多くの人が助けを必要としています。同じ時に同じ地球で生きている者同士助け合うことが大切だと思う人が一人でも増えるように私は自分の話を理解してほしいです。そして私が座うの銘にしている「一波万波」という言葉通り、自分が雫となり、行動を起こしていったならと思っています。そんな私の将来の夢は「国境なき医師団」の一員になることです。世界中の困っている人を私が笑顔にしてみせます。

そして今、私ができることは一人でも多くの人が動くきっかけになること、そしてあの日会ったあの女の子のために髪をのばすことだと思えます。





「戦争という愚かな過ちを、もう二度と繰り返してはいけません。これから戦争のない平和な世界を築いていくのは君たちです。そういうことを今回の経験をきっかけに自覚してもらいたいです。」

これは、修学旅行で訪れた、広島島の被爆体験講話で、被爆者の方が言われた言葉です。この言葉は、私の将来への強いメッセージだと感じました。

私は将来、世界の貧困国と呼ばれる国や、紛争が頻発している国の人たちの生活を支援する仕事に就きたいと思っています。私は幼い頃から、将来は外国に住んでみたいという漠然とした夢を持っていました。それが、『世界で苦しんでいる人の力になりたい』というはつきりした目標に変わったのには、いくつかの出会いがありました。

まずあげられるのは、図書室で見つけた「職業は武装解除」という本との出会いです。著者の瀬谷ルミ子さんは、高校三年生の時に、新聞でルワンダの写真を見ました。ルワンダは、内戦が続き、多くの人が命を奪われ難民となった国です。瀬谷さんは、その写真に強い衝撃を受け、『私は、努力さえすれば自分で状況を変えられる社会に生きている。私には、彼らにはない選ぶ自由があるのだから、嘆きながらも他の誰かが彼らを助けてくれるのを待つのではなく、自分が状況を変える側になろう。』と思ったそうです。そして、内戦があったアフリカ各地で、少年兵からお年寄りまで、武器を持って戦っていた人たちから武器を回収し、一般市民として生活できるように職業訓練をして、社会に戻す活動をしています。

瀬谷さんは生まれも育ちも群馬県の田舎の村。瀬谷さん以外の家族は、パスポートも持っていません。私も小松で生まれ育ち、瀬谷さんと生活状況に大差はありません。私は、瀬谷さんから、現状を知って心を動かされたのであれば、ただ眺めているのではなく、自分で行動を起こすことが大切であること、そして、それは、強い思いさえあれば誰にでもできることであると教えられました。

そして、昨年、グローバルゼミナールで学校に来てくださった浜さ

んのお話は、私に支援の在り方を教えてくれました。浜さんは青年海外協力隊の一員としてラオスで活動された方です。浜さんは、必要な物を渡す支援も、大切ではあるけれど、そこで生活する人たちが、将来に渡って、自分達でやっていけるように、技術を教える支援が必要なのだ、とおっしゃっていました。アフリカで活動している瀬谷さんが、武器を回収するだけでなく、職業訓練する活動を行っているのが、まさにこれだなと感じました。

現在、世界の難民の数は、過去最高の六八五〇万人。貧困者数は、七億二〇〇万人といわれています。特に、発展途上国では多くの人が飢餓に苦しんでいます。このような世界の現状を知り、なぜこのようにならないかと思うようになったのが、私の『世界で苦しんでいる人の支援をしたい』という夢の出発点です。それから私は、世界で平和や生活支援のために活動している多くの人たちの本を探し、読み始めました。瀬谷さんの本もその中で出会った一冊です。

私はまだまだ未熟で、目標からは遠いところにいます。でも、本当に小さな身近な所からでも、国際平和に貢献できることはあるはずだとも思っています。私は今年の夏休み、ラオスに行きます。ラオスでは、絵本図書館という貧しい子どもたちが集まる場所で交流する予定です。「自分のアンテナに引っかかる物があれば、まずその世界に飛び込んでみるのがよい。一歩でも動くと思える世界は確実に変わる。」という瀬谷さんの言葉を胸に、多くのことを吸収してこようと思います。それが、広島で聞いた「戦争のない平和な世界をつくって欲しい」という願いの実現に通じるはずだと思っています。





最近ニュースでは、痛々しく、悲しい事件ばかり報道されています。京都アニメーションでの放火殺人事件、バス停で待つ小学生を襲った殺人事件、大切なはずの家族の命を奪う事件、そして、いじめによる自殺など。近頃は核家族化が進み、身近な人の死に立ち会う事も少なくなってきたからでしょうか。私たちの命を尊ぶ思いが、どんどん薄れていっていると思います。生命の尊さ、生きる命の美しさについて、今、考えてみませんか。

私の祖父は、「難病中の難病」と呼ばれるような病を患っていました。体の中の主要な血管が詰まり、毛細血管に大きな負担がかかるというのが主な症状で、原因は、医療が発達した現在でも明らかになっていません。紫外線にも気をつけなければいけなく、夏でも長袖、冬でも帽子やサングラスの着用は欠かせませんでした。帽子は祖父のトレードマーク。そうとしか思っていなかった私は、それを聞いてとても驚きました。「あと三日の命」そう言われ続け、失明のおそれもあるため、「目が見えるうちに色んなものを見ておきたい」と言って、旅行にもよく行ったそうです。「一年に四、五回、『最後の家族旅行や』言うてようどこでも出かけたわ」祖母はそう話してくれました。一時期は大量の点滴を一日に何本もうって、何度も三途の川の淵に立って、それでも祖父は七十歳まで命をつなげました。

祖母から聞いた話の中に、私は祖父の「生」に対して向き合う姿勢を見出すことができました。まだ二十代で、自分の身体の状況を知らされたばかりの祖父は、祖母に向かってこう言ったそうです。「生きたい」と。何度も、何度も、それはもうはつきりと。寡黙な祖父に、生きることに対してそんなに強い意志があったなんて、思ってもみませんでした。その言葉通り祖父は、どんなに辛い治療も受け入れ、どんなに飲みづらい薬でも飲み、その命を少しでも長くのばせるよう、生きる努力を精一杯したそうです。

最期を迎えた祖父の寝顔はいつも変わらなくて、悲しいけど、百キロマラソンを走りきった！とでもいうように、達成感にあふれていたようにも見えました。

私の母もまた、命のバトンを私へと託してくれた、とても大切な存

在です。母は体こそ健康でしたが、私を産む前に一人、流産で幼い命を亡くしているそうです。少なくとも私は、亡くなった幼い命の上に立っていることも、忘れてはいけなないと思いました。

相田みつをさんの、「自分の番 いのちのバトン」という詩の中には、こう書いてあります。

「過去無量のいのちのバトンを受けついで、いまここに、自分の番を生きている」

当たり前のことだけど、先祖から自分に至るまでの生命の連鎖は、気が遠くなるほどです。命のバトンは、その長い長い連鎖をくぐって私まで受け継がれ、今私の手の中にあります。それほどに多くの人の「生」が関わっているのだとすれば、自ずと今を生きる命の重さが実感できるのではないのでしょうか。

私は、「生きたい」という強い意志のもとに、命は輝くと思っています。私自身は、これまで狭い世界で自分の保身ばかりを考え、前へ出ないこともありましたが、でも、これからは中学校を卒業して、今までもっと広い世界へと私たちは進んでいきます。その先で周りから刺激を受け、更に成長した自分を自分から発信していく。それが私なりの、命の輝かせ方になるのでしょうか。

受け継いだ命の宿命の重さを忘れ、私たちは日々あまりにも漠然と過ごしているのではないのでしょうか。与えられた命を確固たる自分自身で意思で生き抜くこと。これをやり切ると、「生きた」と言えるのだと思います。

辛くても、苦しくても、この命のバトンを手離すということは絶対にあってはいけません。バトンを受け取った皆さんには責任があります。辛いときこそ前を向いて、意志を強く持って、そして生きてください。そうやって、命のバトンをつなげていくのです。





「失敗」と聞くとみなさんはどのようなイメージをもつでしょうか。できれば失敗なんてしたくない。失敗したら怒られる。そう考える人が多いと思います。しかし私は、「失敗」とはそのようなネガティブなものではないと考えます。失敗をもっとポジティブに捉えるべきです。

このように述べた私ですが以前は失敗をとて恐れていました。私は女子卓球部に所属していたので、試合をする機会が何度もありまして。試合ではいつも緊張してしまい練習の成果を出せないまま負けてしまうことが多かったです。ミスしたらどうしようと考えてしまい、体が思うように動かずミスが重なっていきます。自分のミスは相手の得点となり自分の得点との差がどんどんひらいていきます。「追いつかなきゃ。」と思うと余計に焦りがうまれ、どんどん体がたたくなくなっていくます。この悪循環にのみこまれると勝つことはできませんでした。とても悔しくて自分を責めたこともあります。落ち込んでいた時、コーチが一言声をかけてくれました。「失敗したら…と考えるのではなく、今までの練習はどこまで試合で通用するのかを試してい。」この言葉をきいてから試合の負けも試合中のミスも次の試合につなげる材料なんだと思うようになりました。考えが変わった結果、試合中に自身を追いこむことが少なくなっていきました。次の試合につなげられるような中身のある試合ができるようになりました。失敗や負けは悪いことばかりではなく、次につなげるための材料なのだと思え方が変わりました。その時から、前向きに練習したことで団体で県大会に出場することができ、悔いなく引退することができました。

一年生の時、私は校内弁論大会に出ました。全校生徒の前に立つことも大勢の人の前で自分の意見を発表することも初めてだったので今までで一番緊張したことを覚えています。心臓が口から出そうになるという感覚を初めて体感しました。壇上にと皆の視線が全て私に集中した時、怖くて手足の震えが止まりませんでした。会場にいる全員が敵に見えました。そんな極度の緊張状態にあった私は大きな失敗をしてしまったのです。それは発表中にセリフがとんだことです。完璧に覚えた自信があったので、手元に原稿はありませんでした。頭が真っ白になり、セリフがなかなか思い出せません。とても焦りました。「早く思い出さないと。」と思うほどなかなか出てきません。その

時の会場の空気は逃げ出したいほど怖かったです。「失敗したな。私には向いていない。」と落胆したし、出たことさえも後悔しました。そのもやもやはなかなか消えずに私にまとわりついてきました。でも両親は違いました。「よくがんばったね。」と褒めてくれました。その言葉で私のもやもやはふきとび、たとえ失敗しても伝えたい事や思い、頑張りや相手に伝わるのだと気づくことができました。

ではみなさん、今壇上に立っている私はみなさんの目にどう映っていますか。怖さにおおじけづいていますか。私は皆さんの前で意見を述べられることを心から嬉しく思っています。そう思えるのはこれらの失敗を乗り越えたからです。乗り越えたからこそ、このような機会に巡り会うことができました。今は人前で話すことへの恐怖心はひとつもありません。反対にとても嬉しいです。この思いがあり、部長として無事に役目を終え、前期生徒会役員として活動することができています。

失敗を乗り越えたからこそ言えることがあります。それは「失敗を恐れていたなら欲しいものは手に入らない」ということです。部活の場合はミスを怖がって中途半端な試合をしていたら勝利をつかむことはできません。弁論大会に出ていなかったら人前で堂々と話せる自信は今の自分になかったと思います。だから「失敗を乗り越えられること」これが私の武器です。武器を手に入れたことで以前の自分とはちがう景色が見えています。これから先失敗を恐れず、何事にも挑戦していきます。また、自分を信じて物事に取り組んでいきます。この武器がある以上私に怖いものはありません。手に入れたいものがあるならば失敗することから逃げずに戦っていきます。

私の今手に入れたいものは、志望校に合格することです。そのために、ニガテナ所から逃げず、ミスから学んで自分自身と、そして入試本番まで戦います。





あなたは、人を愛したことがありますか。私たち人間の人生は、計り知れないほどの愛であふれています。そして多くの人が、愛の中でも特別な「恋」という感情に引き込まれます。「恋人」と耳にすると、どんな人物が頭に浮かぶでしょうか。異性を思い浮かべる人が多いと思いますが、実は世界には同性愛や両性愛といった感情を持つ人も多くいます。私は、そんな人たちの考え方や感情が、受け入れられる世の中になることを強く願っています。

いま、私たちの暮らす社会では、同性愛者や両性愛者への厳しい偏見や差別、人格否定が蔓延しています。私も以前は、そんな人たちを冷たい目で見たり、差別的に考えてしまっていました。でも、そんな私の冷やかな見方・考え方を反省させる出来事がありました。一年前の夏、雑誌のインタビューで同性愛であることを公表した俳優は、「毎日が試練だ。他人が普通と認める生活に沿えず、数え切れないほど自分を裏切った」と告白していました。私は、ジーンと胸がしめつけられました。これをきっかけとして私は、今の社会に対してたくさんの疑問と怒りを感じるようになりました。なぜ、性的志向が違うだけで差別されなければいけないのか。なぜ、少数派の考え方は見て見ぬふりをされて受け入れられないのか。そして、自然に生まれる感情が否定されなければならないのかと。

自然な感情を元にした選択は、私たちの日常の中で数限りなくなされています。例えば、朝食にパンを選んでも、私を否定する人はいません。もし私が、ご飯を選んでも、私を差別する人はいません。これは、私たちが抱く感情の違いの多くは、互いを尊重することで受け入れられているからです。だからこそ、愛情の在り方も、違いを認め、尊重し合うものになってほしいです。

さて、愛する人への好意が高まれば、法的に結婚したいと願う気持ちを自然と持つようになるでしょう。近年、外国では、同性婚を合法化する国が増えてきています。しかし、残念ながら私たちが暮らす日本では、同性カップルが結婚することはできません。先月、私のクラ

スでは合唱祭の曲決めを行いました。決め方は多数決だったので、私は自分が良いと思っっている曲に挙手することができませんでした。代わりに票を入れたのは多くの級友が手を挙げた一曲でした。なぜでしょう。私は少数派だった自分の意見を主張できなかったのです。今回の私のように、今の日本には、多数派の意見に同調するのが正しい、足並みを揃えれば間違いないだろうという国民性があります。そんな日本の考えを改め、多様な価値観を認めることができる社会にするためには、政治の面からバックアップしていく必要があると思います。そして、そんな政治を実現させる鍵となる存在こそが、私のようなこれから担う若者達なのです。一昨年には、有権者の条件が十八歳以上の男女に引き下げられました。若いうちから政治に興味を持ち、自分の意見を発信していくことが、今後の日本を変える第一歩になると、私は考えます。

これから先、何千年も私たち人間が幸せに生きていくために、世界中の人々に守ってほしいことがあります。自分とは違う人々の愛し方や価値観を持った人を、一人の人間として受け入れてほしいこと。そして、この地球上で生きる人たち全員が、社会で起こる差別や偏見を取り除くために努力し、積極的に発信していくことの一つです。

私は、自分の人生をかけて、すべての人が不自由ない暮らしをするためにつくすと共に、自分に自信を持って自分らしく生きていきます。そして、一人でも多くの人にこういった考え方に賛同してほしいと思います。そうすることできると、「人を愛する」という、一人ひとりが持つ権利が真に尊重され、偏見や差別無き「愛のカタチ」が真に実現される社会になっていくと信じています。



奨励賞 「違う」は「ダメ」なことですか？

中能登町立中能登中学校 三年 上野 菜湖



「あの人、普通じゃないよね、障がいあるんじゃない？」この言葉を言ったこと、聞いた事のある人は多いのではないのでしょうか？私の母も会社で同僚から「子供の学校に少し暴力的な子がいて、あの子きつと障がいあると思うの。問題行動ばっかり起こして迷惑やし、違う学校行ってくれんかな」という話を聞かされとても悲しい気持ちになったそうです。人は何故簡単に普通と違うという事を「障がい」と言い毛嫌いするのでしょうか。

私の弟は発達障がいです。

この言葉を聞いて皆さんは何を思いましたか？「普通とは違うんだな」と思われた方が多いのではないのでしょうか？

それでは、皆さんは両親と同じですか？兄弟と同じですか？もちろん、多少似ていると思いますが、全く同じではないはずです。そう考えると「違う」事は当たり前前の事なのに、「障がい」という言葉に対しては極度に「普通とは違う」と反応してしまう人が多いのは何故でしょうか。

「障がい」という言葉を辞書で調べると「ものごとのさまたげになるもの」と出ています。「さまたげ」を更に調べると「邪魔」だという事になります。それを調べた時、私は何とも言えない気持ちになりました。私の弟は決して邪魔な存在ではありません。私と同じように母から産まれた同じ命なのです。

見た目も性格も似ていない私と弟。それでも、私は弟を普通と違う存在だとは、考えた事はありません。母のお腹に弟がいる事が分かった時は、産まれてくる日がとても楽しみで、産まれてからは、可愛くて仕方なかったのに、今では私に悪態をつくようになりムカつく事もあります。それでも弟が学校でバカにされて帰ってきたりすると、腹が立って腹が立って、私が代わりに言い返しに行きたいと思えるくらい大切な存在です。きっと、皆さんが兄弟に感じている気持ちと同じだと思います。それなのに、なぜ弟はみんなから「違う」と言われ、時にはバカにされたりしないといけないのでしょうか。ただ、人より苦手な事が多いだけなのに……。

発達障がいには目に見えない障がいです。必要な支援は百人いれば、百人違います。目で見て分かる障がいの人と比べると、支援を受けづらい分、生きにくさを感じていると言われています。

以前、母の勧めで自閉症の東田直樹さんの本を読んだことがあります。東田さんは重度の自閉症で会話が出来ません。その本を読み一番驚いたのは、話が出来ないからといって、考えがないという訳ではなく、しっかりと周りも見えていて、感情も豊かだという事でした。それを読んだ時、障がいがあっても、なくても同じ気持ちを持っているのだと気づかされました。ただ少し考え方、見え方、感じ方が違うだけなのかもしれません。私の弟もコミュニケーションが苦手で、家では学校の話などはしないし、友達と呼べる存在もほぼいません。何に困っていて、何に辛い思いをしているのかも分からず困ることも多々あります。それでも母は、毎日学校から帰ってきた時の弟の表情や声から変化を察知し、そして根気強く毎日学校で何があったのかを聞いています。分からないから放っておくのではなく、一歩踏み込み、分かるうとするのが大事なのだとその姿から私は学んできました。

私たちは自分たちの価値観の中だけで「普通」の基準を作り、その基準から少し外れると「違う」と判断し、「違う」事は人に迷惑をかける「ダメ」な事だと自然と連想してしまっているのではないのでしょうか。「違う」事は決して「ダメ」な事ではなく、「個性」だと思えるようになること、みんなが生きやすくなると思います。違う事が普通、違って当たり前だと思える、そんな社会をつくっていくために、私は、弟を通して学んでいることを小さな声でも上げ続けていきたいです。そして、小さな声でも、波紋を起こすことが出来ると信じて、「違うことは当たり前前、違う事は個性」だと言い続けて行こうと思っています。





私は、中学生になる前に、ある大きな選択をしました。それは、七尾中学校に行くか能登香島中学校に行くかという選択です。私は小学生のときから陸上競技をしています。七尾中学校へ行くと、陸上競技を続けることができます。能登香島中学校へ行くと小学校から共に過ごした同級生がいて、また一緒に学校生活を送ることができます。陸上か友だちか、とても迷いました。そして、私は能登香島中学校に進むことを選び、陸上競技はやめ、部活動はバドミントン部に入りました。バドミントンの練習はとても楽しかったです。しかし、陸上をやめたことにより、自分に取り柄がなくなったようで、寂しく、心の中にぽっかり穴があいてしまい、陸上が恋しくなりました。そして楽しいとか、つらいとかではなく、私にとって陸上はどれだけ大切なものであったか気がきました。

そんなある日の昼休み、体育の先生から

「竹中、全能登新人陸上競技大会にてくれないか」と

と声をかけられました。うれしかったです。私は迷わず「はい」と返事をしました。久々に陸上の練習が始まりました。地面をける足、全身に感じる風。なつかしい感覚がよみがえってきました。しんどさまでが爽快でした。

そして迎えた大会当日。少し、自信がありました。もう陸上はやめていたけれど小学校のとき、あんなに頑張っていたのですから。しかし結果は、六位。惨敗でした。悔しさと同時に、陸上を続けていれば……という大きな後悔が私に襲いかかりました。

そのまま陸上を捨てきれず、くすぶっている私に大きな転機が訪れました。バドミントン部のキャプテンを任されたのです。

「私が？」

「私でいいの？」

素直に受け入れることができませんでした。しかし、私は、これをチャンスに自分を変えようと決意しました。すると、私の中で大きな変化が起きたのです。バドミントンに集中するようになりました。好き

になりました。部員をまとめたいと思いました。試合に勝ちたいと思いました。そして、二年生の秋にはバドミントン一筋に、勝利を目指して部員と共に汗を流し、走り、一生懸命に練習する、私がいきました。大会に出れば、毎回賞状やメダルを獲得した陸上とは違って、結局、一枚も賞状を手にする事もなく、部活動は六月に終わりました。しかし、後悔は全くありません。

あの時の私の大きな選択は、正解だったと今、はっきり言えます。あの選択により、私は、二つのチャンスをもらい、一つ目のチャンスを挫折を味わい、二つ目のチャンスを自分で自分を変えることができました。自分がした選択を失敗だと感じ、投げ出さずにはいけません。必ず回ってくるチャンスの波を逃さないこと、その道のベストを尽くすことで、その選択は自分が望む未来へと導いてくれます。

私は、今、中学三年生です。「やはり能登香島中でよかった」と、胸を張って三月卒業することができるよう、残りの九か月を仲間と一緒に全力で勉強し、楽しみます。





みなさんの憧れって何ですか。小さい頃、誰しもが仮面ライダーやプリキュアになりたいと思っただけでしょう。ちなみに僕は、ゴーオンジャーになりたいと思っていました。でも、中学生になると、将来なりたい職業や高校について、真剣に考える人がほとんどです。僕も、将来について考えています。そして、これから僕の将来の夢について話します。

僕の将来の夢は、看護師になることです。僕の祖母と母は看護師をしていました。小学校六年生のときです。僕は足にけがをして、初めて母の勤めている病院に行きました。そこで「今日はどうぞさされましたか。」その後、おかげんどうですか。」と、笑顔で優しく患者さんに接している母の姿を見た瞬間「カッコいい」と思いました。家では、いつも怒っているか、小言を言っただけの母ですが、素直にそう思いました。正直、自分でもビックリでした。だけど、やっぱり仕事の中の母はカッコよかったです。小さい頃は、テレビの中のヒーローに憧れていたのに、初めて働く大人に憧れました。その時から、僕は将来、看護師になりたいと思うようになりました。そして中学一年になり、その思いを母に伝えると「がんばって」と応援してくれました。そして、こうアドバイスしてくれました。「患者さんそれぞれへの対応を考えながら、直接体に処置を行ったりするから、ミスは許されなない。そして、常に緊張感が求められる」ということです。このことを忘れず、看護師への道を歩んでいこうと思います。

また、みなさんは「看護師」と聞くと、女性を思い浮かべる人が多いと思います。実際、現状では男性の割合は一割程度とまだまだ少ないです。友達も、僕が看護師になりたいと言くと、驚く人が沢山います。実際に職場では、男性看護師が一人だけだと、うまくコミュニケーションがとれないと悩んでいる方もいるそうです。ですが、患者さんの体の向きを変えたり、ベッドの移動をするときなど、力が必要な場面では、とても役に立ちます。今後は、徐々に男性看護師も増えていくと思われれます。

そして、僕にはもう一つ夢があります。それは、看護師の知識と英語の力を生かしてアフリカなどの発展途上の国々でボランティアをすることです。小学校六年生のころに、発展途上の国々の状況について、初めて知りました。その後もインターネットを使って、発展途上国について、自分なりに調べています。世界では、発展途上国を中心に、五歳未満で亡くなる子供が年間で八一〇万人もいます。そして、その半数近くが肺炎、下痢、マラリアで命を落としています。日本では当たり前前に治療できても、発展途上国などの国々ではそれが当たり前ではありません。それってとても悲しいことだと思いませんか。住んでいる国や環境によって、命が助かるか、助からないかが決まるのは、おかしいと思います。だから、少しでも多くの人を救いたい。そう思っています。

このような理由から、僕は看護師を目指しています。そのためには、まず看護師の資格を取らなければなりません。今は、中学校卒業後すぐに看護について専門的に学ぶ高校に進学するか、普通高校の高校に進学し、その後、上級学校で学ぶかを悩んでいます。さらに、海外ボランティアに行くためには、英語をがんばって勉強して身につける必要があります。この二つの課題を乗り越えて、今僕が憧れている姿にたどりつけるように、日々の努力を欠かさずにがんばっていきます。患者さんの立場に立って、思いやりを持って看護できる、そんな看護師になりたいです。そして少しでも多くの命を救うお手伝いをします。

みなさんの憧れって何ですか。





普段、車に乗っているとき、救急車のサイレンが聞こえてきたらどんな行動をとっていますか。私の両親はすぐに車を道路の隅に寄せて、救急車が通る道をあけています。きっと皆さんも同じではないでしょうか。

私が先日読んだインターネットの記事で、この話題が取り上げられていました。私たちにとっては当たり前に思える「救急車の道をあける」行動ですが、この記事には海外の方からの驚きの反応が多数見られました。こんなの日本だけ、私の国では道はあけない、といったコメントの中、一つ私の印象に残ったものがあります。それは「日本人の譲り合いの精神は素晴らしい」というコメントです。印象に残ったのには、以前私がつた譲り合いに関する行動に、今でも後ろめたいような思いがあるからだと思います。

私は中学生になってから電車を利用することが増えました。その日は大きな荷物を持っていたので、早めにホームに着いて電車に乗り、二つ座席をとりました。一つは自分が座り、もう一つには荷物を置くためです。自己中心的な座り方と今では思えますが、その時の私には「周りの人も二人がけの席に一人で座っているし別にいいでしょ」という当然の考えでした。いつでも電車の中で周りを見れば、二人がけの席でも一人で座る人が多く見られます。だから席を二つ使うことに對して何も感じず、自分が座っているとなりに知らない人が座ることはないと、勝手に思いこんで電車を利用していました。そんな私に、「すみません、お隣大丈夫ですか。」

と、二人の子供を連れた女の人が声をかけました。私の頭は、一席しかないのに三人つてどうということなんだろうということだといってしまいました。そして、とっさに荷物を持ち、席を立って、小さい声で「どうぞ」と言つて他の車両に逃げてしまいました。落ちついて考えたらどちらかの子供だけでも座らせたかったのではないかなと思えます。しかし、席を立てて逃げてしまった私の行動が無理に席をあけさせたようで、逆に気をつかわせたのではないか、今でも他のやり方が

あったのではないかという思いが消えません。

意外と、お互いが気持ちの良い譲り合いというのは難しいものではないでしょうか。電車内のことを例にあげると、せつかく勇気を出して席を譲ろうと声をかけたのに断られて恥ずかしい思いをすることもありえますし、親切心が正しく伝わらない可能性もゼロではないということです。他人と言葉を交わして自分の思いを正確に伝えようとすると、ハードルの高さを感じてしまいます。ですが、人に親切にしたいという思いは誰にでもあるはずで。

どうしたら日本人らしい譲り合いを増やすことができるでしょうか。私が思うそのためのキーワードは「準備」と「経験」です。人に席を譲ろうとしている自分の姿や、他人に喜んでもらう場面をイメージして心の準備をしておくこと。そして他人に喜んでもらう経験を積み重ねることで、自分の行動に自信をもつこと。自分に対して前向きな思いを持ち、他人と接すること。そんな人が増えることが譲り合いが増えるための一歩だと思えます。

次に、また私の隣に子供を連れた女の人が来るのであれば、

「どうぞ、この席も使つて下さい。」

「良かったらみなさんで座つて下さい。」

「お子さん可愛いですね。」

「お子さんおいくつなんですか。」

と声をかけようと思います。

そんな会話であふれる世の中になれば、未来はもっと明るくなると私は信じています。





「一生懸命頑張らなさい。努力すれば、必ず、自分のためになるよ。」とよく言われます。しかし、本当にそうでしょうか。

私が思うのには、理由があります。中学校最後の合唱コンクールで、私は自ら責任者に立候補しました。二年生の時も責任者をしていてその時は優秀賞が取れたのですが、私が目指していた最優秀賞には届かず、悔しい思いをしました。そこで、三年生でリベンジし、クラスのみならず最高の思い出を作りたいと思い、再び、責任者になりました。しかし、結果は最優秀賞どころか賞も取れずに終わってしまいました。先生方は、「どのクラスも素晴らしいから、どのクラスも最優秀賞」とおっしゃいました。でも、私は「あんなに頑張ったのに」と納得がいきませんでした。

私の努力が足りないのだろうか、そんな思いを抱えていたある日、姉からメールが届きました。それは、2020年に行われる東京オリンピックの観戦に当選したというものでした。東京オリンピックは、「東日本大震災の復興」をスローガンに掲げています。私は、5歳のとき、埼玉県に住んでいて東日本大震災で被害を受けました。大きな揺れ、ガラスの破片、ひな人形が散乱した家の中。恐ろしくて震えがとまりませんでした。でも、東北の人達は、私よりもっと大きな恐怖と悲しみを抱えています。その苦しみをスポーツの力で支えようというオリンピックに、私は心を動かされ、オリンピックについて調べることになりました。そこで感動したことは、オリンピックには、たくさんのお話があるということです。東北に力を与えた物語の主役と例えば、羽生結弦選手でしょう。被災しながら、自分にできることはスケートしかないという強い心で金メダルを獲得しました。しかし、私達に力を与えてくれたのは羽生選手だけではありません。国と国を超えた友情、病气やけがを乗り越え出場した選手のあきらめない心、紛争の中から出場した選手…その物語は、私達の心を震わせ、励まし、勇気づけてくれました。

しかし、物語はオリンピックの中にしかないのでしょうか。いや、

違う・・・賞は取れなかったけれど、合唱コンクールにも、私の心を震わす物語は、あったのです。時間を惜しんで指揮者と伴奏者が曲を合わせ、練習する一生懸命な姿がありました。その一生懸命さに力をもらい、私達も負けじと時間を惜しんで努力しました。また、いつも控えめな友達が勇気を出してみんなの前でアドバイスし、私達もそれに応え、歌声を響かせました。最優秀賞は取れなくても新たな友達の一面に触れ、団結し、クラスの心が一つになった大切な時間がありました。

オリンピックだけではない。勇気、友情、悔しさ、悲しさ、思いやり、希望、夢…それらすべてが私達の周りの一生懸命さ、努力から生まれています。私や私の周りにもいくつもの努力の物語があり、それは、私の心を支え、私も誰かの心を支えていることに気づきました。だからこそ、実らなくても私達は努力を続けるのではないのでしょうか。今、私は「東京オリンピックの聖火ランナー」に応募しています。それは一生懸命努力することが、私達に力を与えてくれると教えてくれたオリンピックで、私にできることはないかと考えたからです。叶わないかもしれませんが、でも、私は、「努力という聖火」を掲げ、自分そして、誰かを支えることができるよう走り続けていきたいと思えます。





いつごろからだっただろう。だけれど最近のこと、私のよく行くスーパーマーケットに自動会計機が導入された。その時の私といえば、初めて使う自動会計機に挙動が乱れ、入金をせかさあの音声に煽られながらも、「うわあどこにお金を入れればいいの?！」と、あわてて入金を済ませた。中学生の乙女がまるで原始人。それが一昨年ほど前のお話だ。あのころ会計の仕方が分からず、何度も店員さんに尋ねていたおばあちゃんおじいちゃんも、今はなんと、流れるように会計を済ませている。考えてみるととても不思議な話だ。これは私の住んでいる七尾市だけのことではないはず。それだけ日本のいたるところに便利が浸透してきているということだ。ただ、私は最初このことを単に良いことととらえていたのだが、なんと、違うのではないか、という意見があるのだ。まず、人間には実際の寿命の他に体感寿命というものがあり、実際の寿命を八十才として体感的には三十八年ほどにしか感じないらしい。そしてこれは人生において日常が楽しいや刺激的だと感じるによって伸ばすことが出来るそう。だが、逆のことを言うと、縮むことだってある。極端に早く早くと便利化を進めると、便利が一人歩きしてしまい、人のやるべきことが無くなり、生きがいの無い、体感的に短い人生になってしまうのだ。しかし、これを回避するにはどうすれば良いだろう。人生において深く自分に影響をあたえ、一生関わっていくこと。それが大切だ。それは何か、そう。仕事である。これまた便利に関わる問題が出ているから大変だ。今ある仕事で便利化のために無くなり失業者が増えるのではないかというものだ。仕事というのは努力や経験の結晶体だ。人生の厚みを増していく。それに人がいるから地域社会と企業が結びつくことが出来るのだ。だからこそ、私達の人生を豊かにしていくためにはこの仕事の有る社会を守っていく必要があると私は考えた。では、どうするのか。確かに、今ある仕事は減るだろう。ただし、新しく仕事を作ることなら出来る。人間は車を作った時運転手という仕事を作った。会計レジを作った。機械が出来るまでは無かった仕事だ。また、今ある仕事を

丁寧にし、密度を上げるのも良いだろう。そうやって、これからの社会や人生を豊かにしていくなら、ごらく、文化色々なものを生み出して仕事をもっと活気のあるものにしていかなければならない。でないと、先ほどの話にもあったように人のやるべきことを失ってしまう。それに日本がかかえる問題は技術だけではないはずだ。だから私達は、あせることをせず、丁寧に、しかし確かに進んで行こう。そうしてこれから日本がオリンピックや万博で世界に注目されている今、この時代だからこそ、丁寧かつ、確実な成長をとげる日本の逞しい姿を世界へ発信していこうではないか。そして私達はたどりつこう。便利だけでなく、全てにおいて誇れる素晴らしい国、日本へ。





みなさんには、本当の友だちといえる人がいますか。何をすることも気の合う友だち、いつも一緒に行動できる友だち、何でも話し合える友だち、そんな友だちは、だれでもいるのではないのでしょうか。そして、そんな人が友だちだと私は思っていました。でも、気が合っても何でも話せること、そのことだけが友だちではないということ、「本当の友だち」とは自分が間違ったときに正してくれる友だちのことなのだ、ということのある出来事をきっかけにして、私は学んだのです。中学校に入学した頃、人見知りの私はなかなか周りの人とうちとけて話すこともできず、友だちといえる人がいませんでした。

二年生になって、同じ吹奏楽部の人と仲よくなり、私たちは意気投合しました。やっとできた友だちといえる人を、私は大切にしたいと思いました。彼女とは、パートも同じだったので、共通の話題が多く悩みも共有できました。部活動や授業のことなど、何でも気軽に話せました。特別な話がなくても、ただ一緒にいるだけでうれしくて、毎日部活動に行くのが楽しみでなりませんでした。

何か嫌なことがあっても聞いてくれる友だちがいる、それは本当に私にとってうれしいことでした。他の友だちとトラブルがあったときも、そのつらさや悔しさを二人で共有することができ、自分の気持ちをわかってくれる人がいるということ、私は大きな安心感に包まれました。そんなとき、これこそが真の友情で結ばれている本当の友だちだと思っていました。

固い絆で結ばれているという思いから、いつしか私たちは、自分たちと気の合わない友だちの悪口を言ったり、避けたりするようになっていきました。

部活動でも、同じパートの先輩からちょっとした誤解を受けたことをきっかけにして、私たちは先輩たちと距離を置くようになりました。そんな状態では、当然音は合わず、一体感もなく、人の心を揺さぶるような演奏はできません。コンクールを目前にして、チームワークを乱すようなことをしてはいけなそうと思いましたが、私は自分の行

動を改めることができませんでした。先輩の悪口を言っている自分に「いけない」と気づくのですが、それを止められず、「まあ、いいか」と思ってしまう自分がいました。

そして、迎えたコンクール。結果は、ひどいものでした。私たちは自分の取った行動の結果がコンクールの成績に表れたのだと思いました。もやもやとした気持ちで部活動の練習をしていたある日、私は友だちから「これからは人の悪口はやめよう」と宣言されました。私ははっとしました。「なぜこの一言を私には言えなかったのだろう」と気づきました。ずっと「これではいけない」と思っていたのに。

私は、その時初めて、私が考えていた友だちのイメージがとても薄っぺらいものであったということに気づきました。それからというもの、私たちは悪口を言いそうになったらお互いに止め合うことができるようになった。

自分が間違ったことをしているときに、きちんと言ってくれる人。そんな人こそ「本当の友だち」だといえるのではないのでしょうか。誤った方向に友だちが向かっているとき、勇気をもって正しい方向に導くことができる人、そんな人に私はなりたいたいと思いました。そして、これからはどんなときも、互いに人として高め合い、成長し合っていけるような「本当の友だち」といえる関係を築いていきたいと思っています。





「仲間」をつくる意味、役割は一体何なのか、みなさんは考えたことがありますか。私は人それぞれで正解はないと思います。

私が「仲間」の存在を大きく感じ、自分を成長させてくれるものだと感じたのは、部活動での経験からでした。私は先月まで、女子バレーボール部に所属していました。同級生十一人のうち私を含めた八人が未経験者という状態から始まり、初めのうちは違う小学校出身の子と仲良くなれるのか、不安でした。お互いぎこちなさのある中、先生や先輩からたくさんさんのアドバイスをもらいながら練習を重ねていくうちに、ちよつとずつでしたが技術が上がっていると、感じられるようになっていました。また、良きライバルとして互いに意識し合ってきたことで、私たちは切磋琢磨しながら日々の練習に励むことができました。そして、

「負けたくない」

この思いのぶつかり合いによって、より上を目指して頑張ろうと思うことができました。

練習中だけでなく、試合の中でも「仲間」の大切さをたくさん学びました。バレーボールは自分のコートにボールを落とすまえば負けてしまいます。声を出し、「仲間」が上げたボールをつないで点にしなければなりません。いくら一人一人の技術があっても、「つなげよう」という気持ちが必要なければ成立しない競技なのです。反対に「絶対つなげよう」と強く思う気持ちがあれば、簡単にボールが落ちることはありません。私は何度も何度も「仲間」に助けられました。ミスしてもカバーして励ましてくれたり、アドバイスをくれたりして救ってくれました。コートの中だけでなく、応援で、

「ナイス！もう一本！」

と明るく言ってくれる「仲間」がいることにより、元気をもらって頑張ろうと思えることができます。

一緒に厳しい練習に取り組み、悔しい思いを味わってきた「仲間」だからこそ、目標に達成したときに共に喜び合うことができるのだと

思います。きつとこのメンバーでなければ、明るく充実した時間を過ごすことも、春季大会優勝、そして県大会出場を成しとげることでもできなかったと思います。

もちろん部活動以外でも「仲間」の存在の大きさに気付かされました。それが、委員会活動です。私は生徒会に入って数か月の短い時間の中で、それぞれを補い合うためにも「仲間」がいるのだと思うようになりました。生徒会を選ぶための選挙で、私は生徒会長として立候補しましたが、心の中は不安だらけでした。積極的に「この仕事、やります。」と言えない私が生徒会長になって良いのだろうか、そう思いました。そんな気持ちを抱きながら始まった生徒会の活動でしたが、激励会や生徒議会などの、生徒会が中心となって行うことには、他のメンバーが進んで司会をしてくれました。そのおかげで、私は自分の仕事に集中することができました。「仲間がいる」という安心感から、新たな一步を踏み出すことができたのだと思います。

私はバレーボールという競技を通して「仲間」に助けられていると感じ、委員会活動から私たちは支え合うことで成り立っているのだと学びました。今までの人生をふり返ってみれば、たくさん「仲間」に支えられてきたのだと実感し、

「私も誰かを支えられるようになりたい」

と思うようになりました。私にとって「仲間」は一つ一つのピースが集まって完成する、ジグソーパズルのような存在で、一人でも欠けていたら私はすばらしい時間を持つことができなかつたでしょう。大きな壁にぶつかったとき、苦しいときに助けてくれる「仲間」がいることは、私にとって誇りであり、財産です。最高の「仲間」をつくることは、最高の人生を送ることにつながるはずです。





私は小学校の頃、数年間、父の仕事の都合でドイツの日本人学校とアメリカの現地校で過ごしました。日本に帰って来て、不思議に思ったことがあります。それは、みんなが授業中に発言しないことです。「全然わからないから発言しない」のではなく、「意見や考えがあるのに発言しない」のです。そのことが不思議でたまらなかつた私が母に相談すると、母は、「きつとみんな空気を読んでいるんだよ」と言いました。

よく日本人は「空気を読む」ことが得意だと言われます。自分の意見を押し通すよりも、みんなの意見を大切に、相手が何も言わなくても「空気を読んで」相手の考えを理解するのです。「空気を読む」私は、これはこれで日本人の良いところだと思うのですが、慣れるまで時間がかかりました。

ドイツでは、テストの点数が満点に近くても発言の少ない子の評価は低く、逆に間違ってもたくさん発言している子の評価は高かったということがありました。その時の先生は、「あなたは、自分の意見をきちんと持っていて、そんなにしっかりと書けるのに、なぜ発言しないの。」と言いました。「いくら考えていても、伝えなければ相手に伝わらないよ。」という言葉に私は、はつとさせられました。国民性や文化は国によって違うけれど、自分の意見を伝えないと何も始まらず、意見を伝えることはとても大切なのだと感じました。

これらのことから外国は「伝える」ことを大切にする文化で、日本は「受け入れる」ことを大切にする文化なのだと感じました。私は日本人です。日本人の持つ、良さを大切にしたいです。しかし、ただ「空気を読んで」受け入れるだけではなくて、思いを「伝え合う」ことこそが、相手の気持ちを「受け入れる」ために必要なのだと思います。

例えば、みなさんは、買い物に行つて買ってきたリンゴが一つ腐っていたという経験はないでしょうか。それがリンゴでなくても、何かの野菜だったり、何かの製品だったりしたとしても、買ったお店にそのことを告げると、たいていの日本のお店の人はこちらの意図を汲み

取つて、「すみません。すぐ取り替えます。」と言うでしょう。

しかし、アメリカでは、そういうことがあつたとき、お店の人は「すみません」とは言いません。それは選んだのが自分たちだからです。自分たちが、「代えて下さい」という意志を伝えるまでは、代えてもられませんでした。やはり、伝えなくては何も始まらないのです。

私は現在吹奏楽部に所属していますが、吹奏楽部にはいろいろな楽器があり、いろいろな音を奏でます。その個性豊かな楽器が奏でるいろいろな音色が一つになったとき、メロディが生まれます。同じように教室も、個性豊かな人が集まっています。その個性を認め、受け入れ、お互いの意見を伝え合うことができたなら、素敵な仲間になれると思います。

部活動の仲間同士でも、練習方法や、考え方でぶつかり合うときもあります。また、ピッチが合わず、音自体がぶつかり合うこともあります。そんなときはやはり、気持ちを「伝え合つて」一つの音楽にしていけます。

皆さんの中にも、友だちに自分の思いを言えなかつたり、友だちがどう思っているのかわからなくて不安になったりして悩んでいる人はいませんか。そんなときは、どうか、ぶつかることをおそれないでください。そして、自分の思いを「伝える」ことからはじめませんか。そうすれば、きつとあなたの思いが「伝わる」はずです。





「一つのアクションで大きな変化を」。私の住む小立野・石引エリアに大きな変化をもたらす為に私が考えたコンセプトです。東には、兼六園や県立美術館。西には湯涌温泉と、観光地に囲まれ、大学病院や美大もある恵まれた環境。それなのに、何故でしょう。街には、シャッターの下りたお店や空き家が目立つようになりました。道行く人は、スマートフォンを見ながら歩くか、速足で通り過ぎていくかで、町並みを見ていません。小さい頃からの幸せで楽しい思い出の詰まった街が、このまま寂れていくのは心が痛むことでした。

私は、考えました。このエリアを、単に通勤・通学路と考えるのではなく、「目的地」にする事が重要なのでは、と。しかも、何度でも訪れたいような。そこで、私は「あったらいいな」と思うサービスを提案します。それは「街のお惣菜屋さんサービス」。商品はヘルシー、デリシヤス、そして、リーズナブルなお惣菜。このサービスのポイントは三つです。作り手の顔が見える事、働きやすい事、食材は出来るだけ地産地消にこだわる事。

こういうお店が何店舗も出来れば、学生は、一人暮らしでも、バランスの摂れた食事がとれるようになります。子育て中のお母さんにとっては、体調が悪い時や仕事で遅くなった時の強い味方となるでしょう。

ここで、視野を広げ、海外に目を向けてみましょう。それは、アメリカのオレゴン州ポートランドです。現在「世界で一番住みたい街」として、注目を集めています。ポートランドでは、企業や市の開発局が、地域の再生に力を合わせていますが、何より、市民が、それぞれの持ち味を生かして、地域の活性化に貢献する仕組みがあります。これがとても重要です。

この例を参考に、誰もが自分の住む町の活性化に貢献でき、新しくお店をオープンしやすい、そんな仕組みを考えてみました。例えば、幅広い世代が集まって、お互いのアイデアを交換する機会を設けること。シャッターが閉まっているスペースや、空き家を安く貸し出す

ことなどです。そうすれば、色々なアイデアで色々な年代の人々が、個性溢れる魅力的なお店を作れます。お惣菜屋さんを始め、バルやケータリング、工芸品、ファッションブランド。さらには、美大生による絵やデザインなどのワークショップ。街は多面性を持ち、「食の街」、「クリエイティブな街」、「アートの街」と、色々な顔を持つようになります。お店同士が連携したり、切磋琢磨したりすることで、街はどんどん活性化され、明るくなっていきます。ここを目的地にしてくれる人も増えてくるはずです。

私が自分の住む街について考えるきっかけとなったのは、社会の授業で街の活性化について考えたことでした。全国的に、街の老朽化が問題となっているのは、ニュースで知っていましたが、まだ自分の街は、対象外だと考えていました。しかし、現実は違いました。この二年間でも、空き店舗は、一つ、また一つと増えてきたのです。

皆さんの住んでいる街はどうでしょうか。そして、皆さんは、どのくらい近所のお店を利用していますか。自分たちの街を守るために中学生の私たちができることは、もっと街のお店に足を運び、まだ皆に知られていない隠れた魅力を発掘する事。そして積極的に発信する事です。相手は、先生やお母さん、お父さんなど身近な大人達とクラスメートです。

皆さん、街のプロフェッショナルになりましょう。You can make a big difference with one action「一つのアクションで大きな変化を」。そうした、私たちの小さなアクションが積み重なって街は、大きな変化を遂げるのだと私は考えます。



十六名の皆さん、どの主張も大変素晴らしいもので、興味を持ってしっかり聞かせていただきました。ありがとうございます。

皆さんは聞き慣れたことかもしれませんが、今、すでに社会はグローバル化、情報化が進み、今日、その変化が予想をはるかに超えた速さで進んでいます。

グローバル化は、物やお金、情報が世界を行き交うだけではなく、様々な人、文化、考え方が行き交う、まさに多様との共存・共生です。そのような状況の中で、問題を解決する答えが見い出せない、または、答えが一つではない状況がすでに国際社会では起こっており、経験や知識が豊かな大人でも、なかなか解決することができないものがあります。

このような多様な文化や価値観を持つ人々との間にある課題を解決するための一つに「対話」があります。これは、相手の意図や考え方を的確に理解し、自ら考え、理由や根拠を加えて論理的に説明したり、反論したり、相手を説得したりすることです。

この対話には、深い思考が必要となります。年齢のまだ小さな子供であれば、夢や理想を述べるかもしれませんが、中学生である皆さんは、解決すべき課題が起こった原因や改善できていない背景についての情報を集め、柔軟な発想と鋭い感覚で思考することにより、課題を解決するための自分の考えを主張することができるのではないのでしょうか。

さて、この「少年の主張石川県大会」の発表内容は、

- ・ 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案
 - ・ 家庭、学校生活、社会及び身の回りや友達との関わり
 - ・ 少年の問題行動、大人や社会の出来事への意見や感想、提言
- であり、

平和について、自分の意見を持つこと、友情について、多様性を認め合うこと、町の活性化、自分の将来、社会への提言、命の大切さなどについて発表がありました。

皆さんは、この県大会に至るまでに、話しの展開や表現の仕方を工夫するとともに、聞く人の心に響くよう、何度も繰り返し練習をしてきたことと思います。どの発表も中学生らしくさわやかな語り口調の中に、その人らしさが表れ、思いが明確に、しかも豊かに表現されていました。

本日の発表は、すべて皆さんの素敵な主張であります。この大会が終わったら、自分の発表を振り返り、さらに深め、高い志を持って、それぞれの夢や希望の実現に向けて歩まれることを期待しています。本日は、貴重な発表を聞かせていただき、ありがとうございます。この大会で発表されたみなさん、ご支援いただいた先生方やご家族のみなさん、さらには、この大会の開催にご尽力いただいた関係者の皆様に心より感謝申し上げます。



令和元年度 少年の主張石川県大会概要

1 趣 旨

中学生が、日常生活での体験や考えを自分自身の言葉でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、中学生世代における社会参加意識の醸成を図るとともに、多くの大人に現代の中学生への理解を深めてもらう。

2 主 催

石川県 石川県教育委員会 石川県健民運動推進本部
独立行政法人国立青少年教育振興機構

3 後 援

石川県市町教育委員会連合会 石川県小中学校長会
石川県PTA連合会 石川県少年団体協議会
明るい社会づくり運動いしかわ 石川県青少年育成アドバイザー協会
石川県BBS連盟

4 日 時

令和元年8月31日（土）午後1時30分～

5 会 場

石川県青少年総合研修センター（金沢市常盤町 212-1 TEL076-252-0666）

6 出場資格

県大会へ出場する生徒は各地区大会で選出された生徒とし、在籍中学校長へは健民運動推進本部より県大会参加通知をする。

7 発表内容

次に掲げる事項の中で、心からの思い、考えたことや感銘を受けたことなどを、少年らしい自由でユニークに、飾り気のない言葉でまとめたもの。

ア 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など

イ 家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど

ウ テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など

8 表 彰

最優秀賞（石川県知事賞） 1名

優 秀 賞（石川県教育委員会賞） 2名

奨 励 賞（石川県健民運動推進本部長賞） 13名

9 その他

(1) 発表内容は、記録集として発表者、中学校長、青少年団体等へ配付する。また、広く同世代の少年及び世代を越えた人々の意識を啓発するために、健民運動推進本部のホームページにも掲載する。

(2) 最優秀賞受賞生徒は、独立行政法人国立青少年教育振興機構が12月に開催する「少年の主張全国大会」出場者選考のための全国大会代表審査委員会へ推薦される。

県大会審査基準

1 採点方法

100点満点とし、各項目の配点は次のとおりとする。

- (1) 論旨・内容 60点
- (2) 表現力 30点
- (3) 態度 10点

2 採点上の観点

(1) 論旨・内容について

- ア 鋭い感性で、新鮮な主張であるか（中学生らしさ）
- イ 新しい情報や視点があるか
- ウ 個人の体験にとどまらず、一般性・社会性があるか
- エ 提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか
- オ 論旨が一貫し、構成がしっかりしているか

(2) 表現力について

- ア 聞きやすく、説得力のある話だったか
- イ 話しぶりに熱意と迫力があつたか
- ウ 聴衆に共感と感動を与えていたか

(3) 態度について

- ア 中学生らしく、さわやかで落ち着いた態度であつたか

3 時間超過の場合の減点

各発表者の持ち時間を5分とし、持ち時間を超過した場合はその時間の長さに応じて各審査委員の点数から減点する。（5分30秒以内は減点しない。5分30秒を超え6分以内は1点、6分を超えると2点の減点をする。）

審 査 委 員

(1) 審査委員長 審査委員長 堂坂 雅光 (石川県市町教育委員会連合会 副会長)

(2) 審査委員 芝田 信栄 (石川県青少年育成推進指導員連絡会 会長)

久木 恵美 (石川県PTA連合会 副会長)

縄 寛敏 (石川県少年団体協議会 会長)

西田 誠一 (石川県小中学校長会 理事)

嶋 耕二 (石川県教育委員会事務局学校指導課 担当課長)

地区大会概要

(1) 加賀地区大会 (加賀市、小松市、能美市、能美郡川北町)

「第38回 加賀地区中学生意見発表大会」

主催 加賀地区市町教育委員会

共催 石川県健民運動推進本部

日時 令和元年8月10日(土) 13:30～

会場 能美市辰口福祉会館

審査員 向出 章 (小松教育事務所長)

石黒 和彦 (加南地区教育委員会連絡協議会長)

谷口 徹 (能美市教育長)

中野 孝子 (能美市学校教育研究会)

野田美由紀 (小松教育事務所国語指導主事)

発表者 (25名)

タイトル	中学校名	学年	氏名
私が考える国際交流	能美市立根上中学校	3	中村 葵
障がいって何?	加賀市立橋立中学校	3	吉田 咲優
レジ袋の有料義務化について	小松市立丸内中学校	3	井田 華楓
今を幸せに生きる	加賀市立東和中学校	3	山口 真歩
互いを知ることで	能美市立根上中学校	2	西山 智哉
人と関わること	小松市立中海中学校	3	森山 京香
ヒロシマ - わたし - つながる平和への思い	小松市立御幸中学校	3	木崎 晏菜
高齢者が暮らしやすい社会に	能美市立辰口中学校	3	東出 向日葵
みんなちがって みんないい	加賀市立東和中学校	3	唐谷 侑花
Have a nice day! (よい1日を!)	小松市立南部中学校	3	吉田 彩葉
私の家族 - 未来は変わる	小松市立安宅中学校	3	新田 望乃佳
夢に向かって	川北町立川北中学校	3	國雲 あかり
本当の友だち	小松市立南部中学校	3	山本 理央
小さな交流から始めよう	能美市立寺井中学校	3	石田 雅貴
生きること	小松市立板津中学校	3	古田 圭
海洋問題に終止符を打つ	能美市立根上中学校	2	林 遼果
三つの意識で減らせる差別	加賀市立橋立中学校	3	谷口 哉翔
伝えることから始めよう	小松市立芦城中学校	2	岩崎 響
差別による心の叫び	能美市立辰口中学校	3	阿波根 芹奈
夢は自由に	小松市立中海中学校	3	白石 さくら
十人十色	小松市立松陽中学校	3	渡邊 美羽
ひと滴の力	加賀市立山中中学校	3	新家 彩桃
僕たちに出来る二つの事	能美市立辰口中学校	2	羽野 泰河
ミュージカルを通して	加賀市立片山津中学校	3	泉 さくら
命を守るために	能美市立寺井中学校	3	寺岡 俐美

(2) 石川中央地区大会 (かほく市、白山市、野々市市、河北郡)

「第29回 (令和元年度) 少年の主張石川中央地区大会」

主催 石川県 石川県健民運動推進本部

共催 かほく市教育委員会 石川県青少年育成アドバイザー協会

日時 令和元年8月17日 (土) 13:30～

会場 西田幾多郎記念哲学館

審査委員 山越 充 (かほく市教育委員会 教育長)

永井 隆和 (石川県河北郡市校長会 津幡町立津幡中学校 教頭)

芝元 徹朗 (白山市PTA連合会 副会長)

清水絵里奈 (石川県教育委員会金沢教育事務所 指導主事)

宮崎 禮子 (石川県青少年育成アドバイザー協会 会長)

発表者 (17名)

タイトル	中学校名	学年	氏名
日本人らしい譲り合い	白山市立北星中学校	3	平木 千咲子
命のバトンはあなたの手に	かほく市立高松中学校	3	上坂 陽奈
「仲間」とは	白山市立笠間中学校	3	嶋口 穂乃佳
自分の武器	かほく市立河北台中学校	3	越野 藍
戦争と対話	白山市立光野中学校	3	税所 蓮
捉え方を変える	野々市市立布水中学校	3	本谷 心彩
声をかける勇気	かほく市立宇ノ気中学校	3	森 璃子
境界線に気づく	野々市市立布水中学校	3	中口 詩織
意見を伝えること	白山市立北星中学校	3	塩崎 杏奈
「主張」することの大切さ	白山市立光野中学校	3	田中 滉大
うわさが与えるもの	白山市立笠間中学校	2	西川 眞由
石川の伝統「方言」	白山市立鶴来中学校	3	林 雅樹
二度と起こさないように	野々市市立野々市中学校	3	神保 来実
相手を見つめて	内灘町立内灘中学校	3	島野 舞
楽しむことの大切さ	白山市立鳥越中学校	3	東藤 汐音
大切な人	津幡町立津幡南中学校	2	山下 聖翔
人間ができること	かほく市立宇ノ気中学校	3	森村 菜穂

(3) 金沢市地区大会（金沢市）

第72回金沢市「中学生からのメッセージ」発表会

主催 金沢市教育委員会 金沢市中学校文化連盟弁論部

日時 令和元年8月18日（日）13:00～

会場 金沢市教育プラザ富樫

審査員 二見 和男 NHKキャスター

市内中学校国語科担当教諭等

発表者（27名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
障がい者と一緒に生きる	金沢市立芝原中学校	2	山本 有紗
夢の先にあるもの	金沢市立城南中学校	3	中山 ひなた
みえないもの	金沢市立浅野川中学校	3	日吉 美理
言葉の持つ不思議な力	北陸学院中学校	3	川端 星衣架
父とのつながり	金沢市立清泉中学校	3	田中 くるみ
共に生きる世界	金沢市立緑中学校	3	所司 葵
「不可能」の反対は「可能」ではない。「挑戦」だ。	金沢市立港中学校	3	池田 彩乃
To make a big difference with one action	金沢市立紫錦台中学校	3	岡田 悠芽
私達にできることを	金沢市立森本中学校	3	高山 彩
模索	金沢市立長田中学校	3	宮永 七帆
個性にして生きる	金沢市立額中学校	3	青倉 結菜
誰かのために	金沢大学附属中学校	3	小坂 眞生
ハンディがあっても	金沢市立犀生中学校	3	長谷田 汐里
「幸せをシェア」	金沢市立小将町中学校	3	細川 心潤愛
共に生きる	金沢市立泉中学校	3	佐々木 和子
「アリ」にならないために	金沢市立高岡中学校	3	三輪 栞太郎
自分らしさ	星稜中学校	2	波木 琉香
強がりの裏に隠された気持ち	金沢市立北鳴中学校	3	岡本 花莉奈
かけがえのないもの	金沢市立医王山中学校	2	水上 暁歩
愛のカタチ	金沢市立野田中学校	3	岡本 杏里沙
自分がつくる物語	金沢市立鳴和中学校	3	岩見 瑚子
少しの声かけで・・・	金沢市立高尾台中学校	3	杉本 倫美
私の経験	金沢市立大徳中学校	3	出口 菜都子
動物にやさしい国へ	金沢市立西南部中学校	3	川畑 杏友
「あたり前」に感謝	県立金沢錦丘中学校	3	針谷 柚月
憧れの姿	金沢市立金石中学校	3	松本 梗耶
きっかけ	金沢市立兼六中学校	3	一條 文乃

(4) 能登地区大会（七尾市、羽咋市、輪島市、珠洲市、羽咋郡、鹿島郡、鳳珠郡）

「第51回全能登私の主張発表大会」

主催 第51回全能登私の主張発表大会実行委員会、七尾市教育委員会

共催 石川県健民運動推進本部

日時 令和元年7月28日（日） 9：00～

会場 七尾市中島文化センター 能登演劇堂

審査委員 木本 三佳（七尾市小中学校校長会 代表）

松中 基（石川県教育委員会中能登教育事務所指導課 課長）

大西 誠（石川県高等学校文化連盟弁論部 部長）

千場恵美子（七尾市女性団体協議会 会長）

山原 真吾（七尾市教育委員会学校教育課 課長）

発表者（12名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
平和について	七尾市立中島中学校	3	前田 花菜
小説から広がる世界	輪島市立輪島中学校	2	田中 ゆあ
未来を決める大きな選択	七尾市立能登香島中学校	3	竹中 乃愛
笑顔が見たい	七尾市立七尾中学校	3	長谷 さくら
地域の思いを大きな輝きへ	輪島市立東陽中学校	1	中川 直重
人生すごろく	七尾市立七尾中学校	2	長田 夕苺
「違う」は「ダメ」なことですか？	中能登町立中能登中学校	3	上野 菜湖
便利はほどよく丁寧に	七尾市立七尾東部中学校	3	黒丸 文月
核や戦争をなくすために	七尾市立能登香島中学校	3	秋元 隆磨
離婚は不幸なことなのか	七尾市立七尾東部中学校	1	小林 杏
伝えなきゃいけないこと	七尾市立中島中学校	3	松井 水香
ニュースから考えさせられたこと	中能登町立中能登中学校	3	井上 莉里

心の扉

東京都 筑波大学附属視覚特別支援学校(中学部) 一年 藤田 大悟

「視覚障害はただ目が悪いだけで、努力すれば健常者と同じように勉強できる。」

普通小で日々を過ごす中、こんなことを思っていました。今思えばその気持ちの後ろには「みんなに遅れを取らないように頑張らなきゃ。」という一心で自分を追い詰め、クラスから自分を守ろうとする見えない鎧を身につけていたのだと思います。

六年生の春。鎌倉への遠足での出来事です。鎌倉は山道も多いことから当初は行くことに乗り気ではなかったのですが、思い出作りと行って行くことにしました。

「班全員で最終チェックポイントを回り終わること。終わった班からお弁当。」というルールで遠足がスタート。全員がチェックポイントめがけ走り出し、班のみんなもどんどん進み、僕との距離は離れていきました。

「僕が視覚障害ってこと、知ってるよね。少し待ってよ。」

と思いましたが、次第にみんなの姿も鎌倉の山道の中に消えていきました。

やっと合流した最終チェックポイントで、

「お前のせいで回るのが遅くなったじゃないか。」

と言われ、愕然としました。

「ごめん。」

この言葉で精一杯でした。遠足終了。

僕は遠足の後、

「みんなの気持ちもわかるけど、あんなことを言われて解決しないまま卒業したくない。」

とじっくり解決の道を探っていました。ふと、

「僕の見え方、配慮して欲しいことを皆に説明したことあったかな？」

と考えた末に「自分」をスピーチで伝えることにしました。

十一月七日、ついにその日が来ました。まず器具を使って僕の見え方を体験してもらおうと、

「大悟ってこんなに覚えてなかったんだ。」
という第一声が飛び交いました。見え方さえ分かり合えていないこと

を知り、今まで説明していなかった自分が情けない反面、話せて良かった、という安心感が複雑に混じりました。次に配慮して欲しいことなどを伝えてスピーチが終了。

この日は僕にとつて貴重な一日となりました。なぜなら、予想以上にわかり合えていなかったことを知り衝撃的だった一方で、現状を伝える大切さを痛感したからです。

そして、スピーチから一ヶ月経った十二月八日、音楽会を迎えました。僕は学年代表としてピアノ伴奏をすることとなり、日々練習に励みました。

本番当日、保護者を前に異様な緊張に包まれた体育館で演奏が始まりました。不覚にも数小節の音が抜けてしまいました。が、日々練習を重ねたことで幸運にも伴奏を再開できました。しかし伴奏終了後は、あれだけ練習したのにと、やりきれない思い、合唱を台無しにしたという罪悪感、鎌倉の時のように皆から責められ孤独を味わうのではないかとこの恐怖、様々な思いが一気に押し寄せます。今までにないほどの涙が溢れました。

恐る恐る教室へ帰るとなんと予想に反してみんなが励ましの声をかけてくれたのです。この時僕は辞書を引いても適する言葉が見つからないほど幸せな気持ちでした。スピーチで皆が本場の僕をわかってくれ、一人のクラスメイトとして受け入れてくれた、と肌で感じられたからです。同時に、皆に対して構えていた僕の中にあつた見えない壁も崩れていきました。この瞬間、気持ちが初めて通じ合い、障害という枠を超え認め合っている仲間の証拠を感じられました。

この体験で新たなことに気づきました。

それは、「自分が障害者だから自分を理解してもらおう」と相手にばかり求めるのではなく、自分も心を開いて相手を受け入れる必要があるということです。このことは当然のことのようですが、その一歩を踏み出すのはとても勇気のいることでした。だからこそこのように体験ができてとても嬉しいです。この体験を心のノートに太文字で書き記しておきたい。

「心の扉を開こう。そして、Let's チャレンジ。」



毎月第3日曜日は「家庭の日」です
家族とのふれあいを大切にしましょう

石川県健民運動推進本部

〒920-8580 石川県金沢市鞍月1丁目1番地
石川県県民文化スポーツ部県民交流課内

TEL 076-225-1365 FAX 076-225-1363

ホームページ [健民運動](#) [検索](#)

メール kouryu@pref.ishikawa.lg.jp

この冊子は再生紙を使用しています